

JBC 第10回全日本小学生ボウリング競技大会

8月3日~4日 / 稲沢グランドボウル



▲各部門の優勝者、左から4年生女子・谷口、4年生男子・高橋、5年生女子・藤田、5年生男子・立花、6年生女子・谷口、6年生男子・林の各選手

2010年にスタートした『全日本小学生ボウリング競技大会』は、この大会の活躍選手から、その後のユースナショナルチームやナショナルチーム選手が数多く輩出されるなど、登竜門的な大会としてますます重要度が増している。第10回を迎えた今年も、小学4年生から6年生までの237選手が集結して、1フロア116レーンの稲沢グランドボウル(愛知・稲沢市)を舞台に熱戦を繰り広げた。(主催:全日本小学生ボウリング競技大会実行委員会)

各部門、予選6Gの上位10名を決勝に選出、決勝3Gの9Gトータルピンで争われた。

小学6年生男子の部

予選1位の下地良尚選手(沖縄・那覇市立城東小)が逃げ切るかと思われたが、最終Gを160と苦しい間に、予選をギリギリ10位で通過の林優輝選手(愛知・一宮市立三条小)が、最終Gの243を含む715を打って、トータル1880の大逆転で

優勝をさらった。

小学6年生女子の部

予選は1195で1位通過の武内羅夢選手(神奈川・大和市立大和小)が、決勝は469と伸ばせず、21ピン差の2位で進出の谷口美優選手(大阪市立北中島小)が552を打って、62ピン逆転する1726で昨年に続く連覇を飾った。

小学5年生男子の部

4年生の部でも優勝の立花仁

貴選手(兵庫・伊丹市立荻野小)が、予選で2位に約100ピン近い差をつけて決勝に進むと、決勝も616の安定した内容で、トータル1952で快勝した。予選2位の佐野裕葵選手(山口・宇部市立西岐波小)が1853で2位を守った。



小学5年生女子の部

決勝で上位選手が伸び悩むなか、3位で決勝進出の藤田妃夏選手(東京・渋谷区立西原小)が、



▲6年生男子優勝の林選手「逆転できるとは思ってなかったのうれしい」



▲5年、6年生と連覇の谷口選手は「来年は中学でも狙いたい」

通過の高橋洸正選手(広島市立温品小)が決勝で641を打って、土肥選手を2ピン逆転する1710で優勝をさらった。



▲4年生男子は、高橋選手が最終Gの大逆転で優勝を飾った

小学4年生女子の部

予選は渡邊陽選手(広島・福山市立深津小)が1050で断トツの1位だったが、決勝は460とペースダウン。渡邊選手から90ピン差の4位で進出の谷口優依選手(大阪市立北中島小)が519を打ってトータル1050で、6年生の部の美優選手と姉妹でアベック優勝を飾った。渡邊選手は24ピン差の2位だった。



▲4年生女子は、6年生女子を制した姉の美優選手とアベック優勝の谷口選手



▲5年生女子を制した藤田選手「予選後半がすごく悪かったけど、決勝で盛り返すことができた」

小学4年生男子の部

予選3位の土肥大輔選手(岡山市立鹿田小)が、決勝1G目225、2G目244を打って優勝は確実かと思われたが、最終G134とブレーキがわかり、5位

U22 5th Fukuoka Summer Cup 2019

8月7~11日 / 東洋スポーツパレス



▲「運転免許を取るので、賞金は車の購入資金に」と畑選手

米・ストーム社のスポンサーでアジア圏のユース世代の育成を目的に行われている『U22 サマーカップ』だが、5回目を迎えた今年も、第1回からの会場・博多スターレーンの閉鎖により、東洋スポーツパレス(福岡市)が熱戦の舞台となった。U22の部は、ぎりぎり6位で決勝に進出した畑秀明選手(神奈川)がごぼう抜きで優勝、賞金50万円などを獲得した。

このところの日韓関係の悪化から、韓国選手団が参加を取りやめる残念な出来事もあったが、

U22の部には、8カ国地域からの41名を含む94選手が出場した。

この大会独特の予選、準決勝を経て決勝には6名が進出したが、Jeremiah Camacho選手(GUM)が1位、Merwin Tan選手(PHI)が2位、Numan Syahmi選手(SIN)が3位と、海外勢が上位を占め、4位に福岡亮選手(長崎)、5位に藤永北斗選手(熊本)、6位に畑秀明選手と、いずれもユースナショナルチームの日本勢が続いた。

決勝は4、5、6位進出の3名で1Gを投球し、最上位者が

勝ち上がり2位、3位進出者と1Gを投球、その最上位者が、トップシードの選手と1Gマッチの優勝決定戦を行う。

日本勢同士の対戦となった決勝1stマッチは、藤永選手と畑選手が7フレまでともに7連発。藤永選手は8、9フレをスペアで268でフィニッシュ。9フレまで9連発の畑選手は、10フレ1投目はやや薄めで⑤を残し、パーフェクトこそならなかったが、279で勝ち上がった。

2ndマッチは、1フレから快調にストライクを連ねるTan選手と、1フレ9本スペアのあと2フレからストライクで追いかける畑選手の争いとなった。9フレ⑦ピンタップでストライクが途切れたTan選手は、気落ちしたか10フレはオープンを作って255。2フレからオールウェーの290を打った畑選手が優勝決定戦に駒を進めた。

優勝決定戦もストライクの応酬となった。先に途切れたのは畑選手。4フレはやや薄めで⑦ピンを残す9本カウント。先行するCamacho選手だったが、7フレは厚めで⑥⑦⑩と割れてオープン。8フレはともにスペ



▲決勝3Gで827を叩く庄巻のボウリングを見せた畑選手



▲優勝は逃したが、独特のフォームからストライクを量産したCamacho選手

アで、畑選手が3ピンリードで迎えた9、10フレ勝負は、ともにオールウェーで、畑選手が258:255と3ピンのリードを守り切った。

決勝の3Gを827と完璧な内容で頂点に駆け上がった畑選手は「決勝のファーストマッチは少しツキもあったけど、セカンドマッチ以降はほぼ完璧に投げられた。右が二人だけだったのは、決勝に関しては逆に有利

にはたらいたかもしれない」と会心の笑顔だった。

昨年誕生したU15部門は、海外からの21名を含む34選手が出場、予選をクリアした26選手がゼロスタートの8Gトータルで争ったが、愛甲雅治選手(宮崎)と熊凌汰選手(福岡)が、ハイスコアによる激しい優勝争いを繰り広げたが、愛甲選手が20ピン差退ける1938で優勝を飾った。

